

麻生幾

Aso Iku

極秘 捜査

警察・自衛隊の
対オウム事件ファイル



麻生幾

Aoi Iku

極秘 捜査

警察・自衛隊の
対オウム事件ファイル

文藝春秋

極秘捜査

警察・自衛隊の「対オウム事件ファイル」

一九九七年一月三十日 第一刷

著者 麻生 幾

発行者 新井 信

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三二一三
電話（〇三）三二六五一一二一

印刷所 大日本印刷

製本所 大口製本

定価はカバーに表示してあります。
万一、落丁乱丁の場合は送料
小社負担でお取替えいたします。
小社営業部宛お送り下さい。

麻生幾（あそう・いく）

『文藝春秋』『諸君！』などに阪神大震災、オウム事件に直面して混乱した官邸内部の生々しい姿を描いたドキュメント・レポートを発表して話題となる。前著『情報、官邸に達せず』はそうしたレポートを基に加筆し、書き下ろしを含めた内容で構成されている。その後も沖縄問題、北朝鮮問題についてもレポートやシミュレーション小説を次々と発表。現在フリーのジャーナリストとして活躍中。

極秘搜查

＊ 目次

プロローグ 11

オウム新東京総本部（一九九三年七月二日）

第一章 化学学校 16

「盤安室」「ヘラクレスII」を買いに行った信者 第7サティアンの悪臭

第二章 ⑤シフト 34

宮崎資産家拉致事件 広域捜査指導官室 オウムの極秘通達 「ミル17」とサリン

「⑤シフト」の始動

第三章 作戦名「√5（ルート・ファイブ）」 57

オウムからの「挑戦状」 第7サティアン内部の写真 假谷清志さん拉致事件 刑事警察と公安警察 警察庁最高幹部会議 アタッシェケースの「黙示」 警視庁と警察庁の対立 「ルート・ファイブ」の始動 自衛隊と警察——史上初のジョイント会議

第四章 サリン・テロリズム 101

サリン・テロ前夜 自衛隊関係者たちの朝 大臣秘書官たちの朝 大混乱の警視庁「国家へのテロだ！」 陸上自衛隊東部方面隊は休暇中 警察と自衛隊の「官庁間協力」有毒ガスの「正体」 対化学戦医療マニュアル サリン検出の衝撃 六名の化学学校化学者たちの特別チーム 車からの「大臣命令」「実戦」さながらの治療 内閣合同情報会議 自衛隊出動開始！ 無線が通じない「地下の戦場」 命を賭けた決断

「サリンが出た！」 二十日深夜——警察庁最高幹部会議 米軍関係者の関心

第五章 Dデー 204

ルート・ファイブ・オペレーション 第二回・自衛隊&警察ジョイント会議 治安出動準備オペレーション ラジコン・ヘリvs.対戦車ヘリ「コブラ」 オウムの隠密行動 寝台特急「はくつる」 「治安出動シミュレーション」の完成 第7サティアンへの突入 「重要参考人」は全員逃亡

第六章 オウムvs.警察 252

滋賀の光ディスク Nシステム・PAT・POT 刑事警察と公安警察の「切り分け」 パスワードの暗号解読 國松孝次警察庁長官狙撃事件 幻の「長官通達」 オウムに脅える閣僚たち 公安警察——秘匿部隊の投入 狙われた警察官宿舎 水道水への細菌テロ対策 石川県警大捜査網 検出された「掌紋」 巨大なコスモクリーナーと皇居 「ハルマゲドン」封じ込め 「麻原はどこにいる」 史上空前のオウム包囲網 警察庁刑事局の矛盾 「井上の女を探せ！」 狙われた皇室とディズニールランド 八王子の秘密アジトを発見 隠し部屋にはいなかった麻原 「松本剛に間違いない！」 ラジコン・ヘリ

エピローグ 373

今も続く極秘捜査 防衛庁幹部の回想

謝辞

380

カ
バ
ー
写
真
装
幀

坂
田
政
則
共
同
通
信
社
文
藝
春
秋

警察庁電送室宛――口頭連絡（平成七年三月二十九日）

「警察庁長官から、管区警察局長及び全都道府県警察本部の長へ、重要通達を近く発信する」

極秘

警察庁各局・各部・各課長

各付属機関の長

各地方機関の長

各都道府県の警察の長

殿

警察庁(甲) 刑事局発 第 号

警察庁(甲) 警備局発 第 号

警察庁(甲) 交通局発 第 号

警察庁(甲) 長官官房発 第 号

警察庁(甲) 情報通信局発 第 号

警察庁(甲) 生活安全局発 第 号

平成七年 月 日

警察庁長官

「オウム真理教」に対する取締りの徹底及び、サリン使用犯罪の絶対防圧について

「オウム真理教」は、一般市民の略取誘拐事件、教団施設内における信徒の逮捕監禁事件を引き起こしたほか、教団施設内に、サリン等の原材料を大量に保有し、サリンを製造していたことが科学的に証明された。

サリンは、殺人以外に使用目的のない物質であり、同教団の活動をこのまま放置すれば、一般市民に対する無差別殺人につながりかねず、治安上極めて憂慮すべき状態にある。

「オウム真理教」に対する取締りの徹底及び、サリン使用犯罪の絶対防圧は、警察が全組織を挙げて取り組まなければならない最優先の課題である。

各位におかれては、このような国民生活に多大な脅威を与える犯罪行為を断固根絶するという決意の下に、

- 1 警察の総合力の発揮
- 2 捜査追及体制の強化
- 3 捜査及び実態解明の徹底
- 4 サリン使用犯罪の絶対防圧
- 5 国民の理解と協力の確保

の諸点に留意の上、的確な諸施策を推進されるよう最大な努力を払われない。

前頁の「甲」と題された通達は、警察庁でも最も権威がある最高ランクの「警察庁長官通達」であることを示している。

日本警察の全セクションに宛てられるべく作られた、極めて異例の通達だった。

國松孝次警察庁長官が凶弾に倒れる前日、一九九五年三月二十九日に作成されたが、一度も発信されることはなかった。

日本の治安史上に残る“幻の長官通達”として、記録に留められている。

極秘捜査

— 警察・自衛隊の「対オウム事件ファイル」 —

プロローグ

オウム新東京総本部（一九九三年七月二日）

実験がいよいよ始まった。細長いビルのの中では、培養液が浸されたタンクから伸びたポンプから、電動モーターでゆっくりと「液体」が汲み上げられていった。なにしろ九階の屋上まで上げなければいけない。二十メートル近くはあった。そのために強力なモーターと大型バッテリーが大金をはたいて購入されていたのだ。「液体」は予定通り、一分もかからないうちに目的のポイントに達した。そこには、ポンプと結ばれている高性能の電動式ファンが取り付けてあった。綿密に計算されて設計された、彼らの自慢のファンだった。実験開始時間は、午後十二時ちょうどと決められていたが、まだ少しの余裕があった。

集まった男たちは、防護マスクを付けだした。果たして実験は成功するか、どうか……。彼らにも、初めての経験だったので想像も付かなかった。

正午ちょうど。「フンシャー!」。実験をスタートさせる声が上がリ、記録係の若く男が「Campus」と表紙に刷られた市販のノートに、数字を書き込んでゆく。「一秒、二秒、三秒、四秒……」。時間の経過とともに、「フンシャ」した液体の量を、若い男はノートに急いで書き込んで行く。「〇・二、二

・八、三・五……」。

一分ほど時間が経過した。ポンプから汲み上げられた「液体」は、すでに大型ファンによって、辺りに広く散布されている——はずだった。

その時、外から大声が聞こえて来た。「屋上からは、白い煙が上がっています！ 何かおかしいです！」。男たちはビルから飛び出した。そのうち、ポンプの配管からも「液体」が漏れだして来たことを別の若い男が見つけた。「ドロドロと流れ出しています！」。その瞬間、付近に酸性の強い刺激臭が漂いはじめた。

「失敗だ！ 失敗！」。オウム真理教で科学技術省と呼ばれる組織の総責任者であつた村井秀夫は、近くの男たちにそう怒鳴って、早くも後片付けをするように指示した。

当初の計画では、「液体」がファンによって霧状になり、空気中に無色無臭のまま拡散するはずだった。そして、霧の中に含まれた何千という「細胞」が空気の流れに乗って自由に浮遊し、辺り一面に降り注ぐはずだった。だが、実験が完全に失敗したことは明らかだった。問題はファンやモーターではなかった。「細胞」を育てる培養液の調合そのものが失敗したのである。

一台の車を取り囲み、何人もの男女が罵声を浴びせかけていた。

「出てこい！ 卑怯者！ コラ！」

素手でフロントガラスを思いっきり叩き割り、手から血を流す男性もいた。彼らは付近に住む普通の住民ばかりだったが、いずれの顔も殺気だっていた。住民たちに行方を妨げられた車の後部座席には、まんじりともせず太った髭面の男が一人座っていた。

「コイツだ！ 引きずり出せ！」

ドアを強引にこじ開けようとする住民たち。中にはバットまで持ち出して来た男もいた。余りの殺

気だった雰囲気にも身の危険を感じたのか、後部座席にいた男は、ようやく外に出てきた。その途端、住民の一人が男の髪をわしづかみにして、引きずり出した。

「麻原― このヤロウ―」

オウム真理教の代表、麻原彰晃は住民から小突かれ、髪の毛を引っ張られるなど、揉みくちゃにされた。

事の起こりは、オウムが「新東京総本部」と名付けたビルから、腐った肉のような我慢ならない強い悪臭が付近に立ち込め、大騒ぎになったことに始まる。ビルの排気口からも、茶色のドロドロした気味の悪い液が滴り落ち始め、住民から地元の亀戸警察署にも苦情が殺到。しかし、住民が抗議のために大挙して「新東京総本部」に押しかけても、オウム側はまったく無視を続けた。そして、住民の怒りがイッキに爆発したのだった。

「また、オウム真理教がトラブルを発生させました」。この光景はテレビのワイドショーでも取り上げられた。オウムが、またインチキな宗教儀式をやっているんじゃないか――。スタジオのコメンテーター達の口ぶりは、いずれもこんな具合だった。現場から中継するレポーターの一人は、「オウムは今まで、精液を信者に飲ませていた」「血液をジュースに混ぜて信者に与えていた」という噂を伝えていた。この時、オウムを取り上げるテレビのワイドショーは多かったが、超能力などをアピールする神秘的な教団、どこか怪しげな集団といったイメージでおもしろおかしく報じていただけだった。

東京・桜田門の警視庁十八階。警視庁公安部の幹部の一人は、オフィスのテレビでこの光景を特別な思いで眺めていた。

「警視庁管内では、まだ事件を起こしていないが、いつかは何かやらかすぞ……」
公安警察にとって、組織犯罪の前兆を掴み、調査を行い、その危険性をあらかじめ掴んでおくこと

は使命である。

亀戸での騒動の数日後、警視庁公安部長からの口頭による「指示」が、幾つかの所轄署に伝わった。「オウムの施設を管内に抱える各所轄署の警備課においては、視察活動を行え」

指示が伝えられたのは、オウムの杉並道場がある杉並警察署、青山にある「東京総本部」を抱える赤坂署、そして亀戸署のそれぞれの公安警察セクションである警備課に宛てられたものだった。

公安警察官は、東京総本部の前や、杉並道場の近くに密かに立ち、秘匿した形で施設の構成人数、人の出入りの状況を調べ続けた。また、出入りする車のナンバーをすべて控えた。「秘匿した捜査」と言っても、スパイもどきの、決して恰好のいい作業ではない。事件を捜査するわけでもなく、単に「見る」作業だ。地道でかつ極めて地味な仕事だった。

当時の公安部幹部は、こう語る。

「正直言って、変な宗教団体が住民とのトラブルを頻発させる危険性がある、くらいにしか思っていないませんでした。だからちよっと、監視して来い、と言った感じだったので」

事実、三つの警察署へ視察活動の指示が下りたものの、それぞれ担当はわずか一名。それもオウムだけをやればいい、という専従でもない。警備課一係が日本共産党を調査する片手間に行うというレベルだった。

一九九三年秋の段階では、警視庁公安部全体で「オウム担当」は、これら三つの警察署のわずか三名だけだったのである。

公安警察官の任務のほとんどは、水面下の視察活動だ。新聞やテレビで花々しく取り上げられる事件として報いられるケースはほとんどない。集めた情報は何年も、何十年も倉庫に眠ってしまうことも決して珍しくない。

だが、この時の彼らの地道な努力は、決して無駄には終わらなかった。汗と足で稼いだデータは着